

水よく船を浮かべ船を覆す —徳川家康 江戸を変える—

(株)日本設備工業新聞社
代表取締役社長 高倉克也

天下統一を果たした豊臣秀吉から関東への国替えを命じられた。たしかに領地は増えたものの、政治・経済・文化の発信地である京都と大阪から遥かに遠ざかる。しかも片田舎の江戸に本拠地を構えろという。徳川家康（1542—1616）は複雑な心境で秀吉の命令を聴いていた。

当時の江戸は葦の生い茂る低湿地帯で漁村が点在する辺鄙な土地だった。秀吉に匹敵する実力者の家康が別の本拠地を選んでも問題はなかった。家臣たちは小田原か鎌倉になると予測していた。小田原は北条家の拠点として長く栄えた城下町で小田原攻めでも城はほぼ無傷のまま残っている。鎌倉は源頼朝が鎌倉幕府を開いた歴史的な聖地だ。

だが家臣たちの期待は見事に裏切られた。家康は未開の地・江戸を将来にわたる本拠地と定めた。家臣たちはまるで想定外の決断に驚愕する。

戦いは辛抱の強い者が勝つ

家康は^{みかわのくに}三河国、現在の愛知県東部を治める松平家の嫡男として岡崎城で生まれた。幼名は竹千代。幼い頃から戦国大名の熾烈な覇権争いに翻弄され、6歳のとき織田家、8歳から今川家の人質となる。今川家の拠点である駿府、現在の静岡県静岡市で19歳までの12年間を過ごす。

織田信長が1560年の桶狭間の戦いで今川義元を打ち取ると、信長と清州同盟を結んで今川家から独立する。青年期から壮年期に浜松城と駿府城を居城として信長と共に勢力を伸ばし、最強の戦国

武将といわれた武田信玄らと対峙した。

しかし明智光秀の謀反による1582年の本能寺の変で信長は討ち死にする。空白となった天下人の座は豊臣秀吉が制し、関東を手中にするために小田原城を拠点とする北条家の討伐を開始する。家康も忠誠を誓って小田原攻めの先鋒を務めた。

北条家降伏後の1590年、秀吉から北条家の旧領地である関東への国替えを命じられた。これまで領有していた駿河・遠江・三河・甲斐・信濃の5カ国を召し上げられ、新たに武蔵・伊豆・相模・上野・上総・下総・下野・常陸の8カ国を与えられた。石高は従来の150万石から250万石へ大幅に加増され、秀吉の数多くの家臣の中で最大の領地を治めることになる。

とはいえ家康は都から遠ざかり、縁の深い三河や駿河を失い、北条家の残党による不穏な動きもあって冷遇されたと見做す者も少なくなかった。たしかに秀吉は信長が見込んだ家康を恐れていた。少しでも遠くへ追いやり、そのあいだに豊臣家の支配を限りなく盤石なものにしたい。それが秀吉の本音とっていいだろう。

それでも家康は動じなかった。これまでの経験



徳川家康の肖像画

から力に頼るのではなく「もっとも多くの人間を喜ばせた者が、もっとも大きく栄える」と信じていた。「戦いでは強い者が勝つ。辛抱の強い者が」と自分に言い聴かせて駿府から江戸をめざす。

利根川東遷の歴史的工事

江戸の江は水が入り込んだ入江、戸は出入口を意味し、入江の出入口が江戸の名称の起源という説がある。家康はなぜ辺境の江戸を関東の本拠地にしたのか。小田原も鎌倉も山に囲まれ、攻められにくい反面、都市としての広がりには難しい。関東平野の中心に位置する江戸は海に面しているうえに幾筋も流れる河川の終着点であり、物資を運搬するのにこれほど都合のよい場所はなかった。大阪が典型的なように都市の発展には物資の流通が不可欠だ。家康は厄介な水の問題さえ解決すれば可能性は無限に拓けると確信した。

江戸に到着した家康はまず江戸城の改築工事に着手する。扇谷上杉家の家臣・太田道灌が築いた江戸城は室町時代のもので荒れ果てていた。江戸城から江戸湊、現在の東京湾まで水路をつくり、建築資材などを速やかに搬入した。

次に賑やかな城下町にするために現在の皇居付近まで迫っていた海の埋め立て工事に乗り出す。土は駿河台南端の神田山を切り崩して調達した。現在の日比谷公園や新橋界限はこのときの埋め立て地だ。神田山の跡地は高台の神田駿河台として当時の名残りをとどめている。

たびたび洪水を起こしていた利根川は関東平野を南へ下り、荒川や入間川などと合流して江戸湊に注いでいた。家康は1594年、関東郡代に抜擢した伊奈忠次に命じて利根川東遷といわれる歴史的な治水工事を開始した。江戸湊に流れ込んでいた利根川を東に移し、太平洋に面した銚子から流すという壮大な計画だ。立案にあたって家康は病死した武田信玄が精魂を傾けたという釜無川などの治水事業を視察していた。敵対していたとはいえ領民の命を守り、生活を安定させるために全力を尽くした信玄を深く尊敬していたという。

利根川の流路を変える大工事は最終的に30余年の歳月をかけて達成された。利根川だけでなく荒川にも堤防を築き、領民のための用水路や排水路

を整備する。利根川東遷によって洪水の被害は激減し、低湿地帯を耕作地に変え、江戸と太平洋の水運を直結させるという快挙を成し遂げた。

重荷を背負って遠き道を

治水事業と並んで飲料水と生活水の確保も死活的な課題となっていた。当時の江戸は満潮になると海水が押し寄せ、井戸を掘っても塩分が強くて飲めなかった。家康は大久保藤五郎に命じて日本初の水道整備を試みる。かつて家康の小姓を務めていた藤五郎は合戦の際に腰を痛めて家康の菓子づくりに転じていた。さっそく調査を開始し、約3カ月で小石川目白台下の小川から神田方面へ小石川上水と呼ばれる木製の水道管を引き、各地の井戸へ配水した。小石川上水はのちの神田上水の原型として二代将軍・秀忠から三代将軍・家光に引き継がれ、三代にわたって完成する。

秀吉他界後の1600年、家康は関ヶ原の戦いで豊臣軍の総大将である石田三成に勝利し、1603年に後陽成天皇から征夷大将軍に任命された。頂点を極めた家康は江戸幕府を開き、明治維新まで264年間に及ぶ幕藩体制の礎を築く。晩年はふたたび駿府に戻り、波瀾に充ちた生涯を閉じる。

江戸は18世紀の初頭に人口100万人の大都市に発展する。天下人となった家康は「天下は天下の人の天下にして、我一人の天下と思うべからず」と釘をさしていた。二代将軍・秀忠には「水よく船を浮かべ、水よく船を覆す。ただこのことを、よく心得られよ」とたびたび論じていたという。水を領民、船を幕府にたとえ、水は船を浮かべる力を備えていると同時に船を転覆させる力も備えている。この道理をよくわきまえておくようにと後世に語り継がれている。

苦労人の家康の生きざまは「人の一生は重荷を負うて遠き道を行くが如し。急ぐべからず。不自由を常と思えば不足なし。心に望み起こらば困窮したるときを思い出すべし。堪忍は無事長久の基、怒りは敵と思え」という遺訓に集約されている。領民を武力で支配するのではなく支持されることによって天下を制す。人生50年の時代に70歳を超える長寿をまっとうした家康は同時代の誰よりも遙か遠くを見つめていた。